

赤米ニュース

第267号

(2019年6月30日)



東京赤米研究会

〒186-0005 東京都国立市西3-7-29 アゼリア国立2-101 長沢方 (Tel042-577-6855)

6月の赤米作り	2134
おしらせ	2136
おたより	2137
稲の収穫祭と神社信仰 (VIII)	長沢利明 2138
表紙解説：ニッポン寿司列島⑥ーバッテラ寿司 (大阪府)	2140

6月の赤米作り

●6月の赤米作りのポイント

初夏の種まきから、はや1ヶ月がたちました。皆さんのお宅の赤米稲の赤ちゃんの様子は、どうですか？。きちんと芽が出ましたか？。すくすくと早苗が順調に育っていますか？。駄目だったという方々は、今からもう一度やり直してみてください。決して遅すぎるということはないですから、大丈夫です。順調にいった方々の場合、もう赤米稲の苗はすっかり大きくなっていることと思います。初夏の日差しを十分に浴びて、これから赤米稲はもっともっと大きくなっていきます。今月は苗の成長を、さらに促進させてやるための、環境作りという点に重点を置いて、作業を進めていくことに致しましょう。

●ガス抜きパイプの設置

初夏から盛夏の頃にかけての、ミニ田んぼの土中ではこの時期、有機物が分解してガスが発生しやすくなってきています。それは土中の微生物の活動が活発化して、肥料や土壌中の養分を、活発に分解し始めるためです。その結果、土中には微生物の活動によって生れた炭酸ガスやメタンガスが溜まっていきます。ガスが地中に溜まったままですと、稲の苗の根を傷めてしまい、急速に早苗の成長がにぶったりすることがあります。そこで、そのガスを抜いて空気中に放出させてやるための通気パイプを、土の中に立ててやるのです。面倒くさいと思われる方々は省略して下さいてもかまいませんが、できることならやっておきましょう。

パイプは塩化ビニール製の管でも、ゴムホ

図3 ガス抜きパイプの設置法

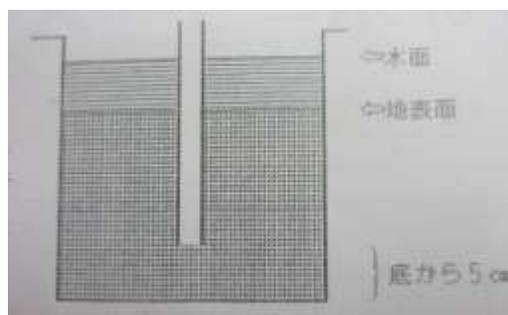


図4 バケツ栽培とガス抜きパイプ

(バケツの中央に1本のパイプを立てる。プランターの場合は2本)



ースを切ったものでも、何でもかまいません。節を抜いた竹でも、サランラップやファクシミリ用のロール紙の芯でもいいですし、要するに太い管になっていれば何でもよいのですが、トイレトペーパーの芯では、やや短かすぎますし、強度も落ちるので不適です。

ガス抜きパイプは、バケツの場合は真ん中に1本、プランターの場合は2本ほど立てて下さい。立て方は図3～4のようにし、パイプの下端が容器の底から少し離れるようにして、その上端が水面からわずかに飛び出すような形にセットします。パイプの中に水が満ちていてもかまいませんが、土が詰まっていたはいけません。中が空っぽになっていしまうと、そこからガスが抜けませんので、気をつけましょう。



写真5 成長した赤米稲の苗

● 苗の成長と水位の調節

6月のミニ田んぼに育つ赤米稲の早苗は、図5・写真5のような状態に成長しています。苗の草丈は約15～20 cmほどに伸びているはずで、すでに5～6枚の葉が出て、早くも分けつを始めている株もあるはずで

種まき・発芽直後の赤米稲の芽は、細い針状をしています。それが子葉で、双子葉植物のように双葉ではありません。稲は単子葉植物ですので、子葉はつねに1枚です。発芽後、2～3日しますと、子葉の先端から本葉

があらわれてY字状になりますが、それが第1葉です。第1葉はその後、枯れてしましますが、第2葉・第3葉が次々に出てきて、6月中旬には第5葉・第6葉までが出揃い、葉先が長く伸びていきます。早苗の丈が10 cmを超えた頃からは、苗の成長に合わせて少しずつ、ミニ田んぼの水位を少しずつ深くしていきます。

その結果、ミニ田んぼはいかにも田んぼらしくなっていきますが、水の深さは苗の丈の3分の1ぐらいに保ちます。苗が15 cmほどに成長した時点での水深は、およそ5 cmということになりますが、その後はいくら苗が大きく伸びても、水深10 cmまでにとどめて下さい。あまり深く水を入れる必要はありません。ガス抜きパイプの高さも、それに合わせて調節します。水面からほんの少し飛び出たぐらいの高さが適切です。

苗には十分に日光を当て、梅雨時シーズンを迎えましょう。梅雨が明けて夏になれば、赤米稲は急激な成長を開始します。それは本当に驚くばかりの成長ぶりです。タケノコのようにぐんぐんと苗が伸びていきます。楽しみです。それでは7月にまたお会い致しましょう！。

図5 苗の様子



おしらせ

●水彩画展に赤米の作品

本会会員で東京都国分寺市在住の高橋寿子さんがこのたび、武蔵国分寺種赤米稲を描いた水彩画作品を制作され、水彩画展に出品されました。展示会は第78回水彩連盟展で、東京都港区六本木の新国立美術館において、2019年4月3日（水）～15日（月）に開催されました。この展示会は東京での開催が終了した後、引き続き愛知会場（愛知県美術ギャラリー・4月23日～29日）と大阪会場（大阪市立美術館・5月8日～12日）を巡回する予定です。

高橋さんは昨年、恋ヶ窪公民館での赤米講



高橋さんの作品「古代からのいぶき」



作品を前にした高橋寿子さん

座を熱心に受講され、稲刈りや試食会、熊野神社での新嘗祭などにも積極的に参加されましたが、大変得るものがあったと言っておられます。初めて赤米のことを知り、おおいに感動をされたので、その気持ちを絵画作品に表現することを思い立ち、昨年中からその制作に取りかかって、今春ついに完成させることができたとのこと。作品は「古代からのいぶき」と題された半抽象絵画で、10号サイズの大作です。幻想的な背景の中に描かれた赤米の真っ赤な稲穂のフォルムが、まことに印象的な作品です。国分寺市内でもぜひ展示をして、多くの方々に観賞していただきたいものです。

●「わんぱく学校」で赤米作り

東京都国分寺市の教育委員会社会教育課では毎年、小学校5～6年生を対象に「わんぱく学校」を開催しております。毎月1回、子供たちを集めて野外体験や宿泊実習など、さまざまな活動をおこなっており、市内の多くの子供たちがこれに参加しています。2019年度の活動内容がこのほど決まり、公表されておりますが、それによると第1回（4月）が開校式、第2回（5月）が宿泊実習基礎講座（火起こし体験・調理実習）、第3・8・11回（6・8・11月）が「郷土を知る」講座、第4回（6月）がウォークラリー、第6回（8月）が宿泊実習（長野県鍋倉高原）、第7回（9月）が異世代交流体験、第9回（10月）が武蔵野うどん作り、第10回（11月）がハンディキャップ学習、第12回（12月）が閉校式となっております。

これらのうち、第3回の「郷土を知る①」で、今回初めて赤米作り体験が取り上げられることとなりました。5月26日（日）の午

前中に子供たちへの赤米に関するレクチャーがおこなわれ、午後には畑への赤米の種蒔きがなされる予定です。くわしくは国分寺市の公式ホームページをご覧ください。

●「わんぱく学校」の赤米畑の耕起作業

国分寺市の「わんぱく学校」に参加する小学校5～6年生の児童らが、今年は赤米作りに挑戦することになっております。「わんぱく学校」の赤米畑は、武蔵国分寺跡の史跡指定地内に位置し（国分寺市西元町4-4）、現在は市有地となっている空地で、七重塔跡地のすぐ近くにあります。5月26日（日）に予定されている種まきに先立ち、4月16日（火）には畑の耕起作業がおこなわれました。作業を担当されたのは、地元西元町在住の協力農家、小坂良夫さんです。市社会教育課・ふるさと文化財課の職員らや赤米セミナーのメンバー、市議員の須崎宏さんたちも立ち会われ、皆が見守る中、小坂さんの運転するトラクターが動き出します。草ぼうぼうだった空地はトラクターの威力で見ると見るうちに耕され、畑らしくなっていました。1週間後にもう1回、種まき前日にさらにもう1回、耕してようやく完了となるそうです。小坂さんの御奉仕には、心から感謝を申し上げておきます。



赤米畑を耕すトラクター

●国分寺四小の赤米作り決定！

東京都国分寺市の市立第四小学校では本年、学校をあげて赤米作りがなされることとなりました。5年生の児童130人が全員、「マイ・バケツ」を用意して「武蔵国分寺種」赤米稲を育てることになっております。4月からはすでに、児童らが自らインターネットを利用して赤米に関する情報調べなどを授業の一環としておこなっており、準備は万端です。4月18日（木）には、国分寺カルティベイトの坂本浩史朗さんが四小をおとずれて、打ち合わせや指導をおこなっており、種籾は市内在住の農家、本多知明さんが提供して下さる手はずが整っております。5月18日（土）には同校で学校公開行事がおこなわれ、4時間目の授業で本会の長沢利明さんが、5年生の児童130人と教職員・父兄らを前に、赤米の歴史や文化に関するわかりやすいレクチャーをおこなうことになっております。

おたより

●今年もがんばります（川口哲秀）

いつも『赤米ニュース』ありがとうございます。今年は以前送っていただいた籾で、育てます。去年は猪豚と台風のダブルパンチでまいりました。今年も天気は不順と思ってがんばります。猪豚は囲をしました。おにぎり3コが目標です（4/15：大阪府東大阪市）。

●すでに種まき終了（坂本浩史朗）

私の所では、もう今年の赤米作りが始まっています。昨年同様、市内2ヶ所（エクス山・恋ヶ窪）のほか、小金井市の東京学芸大学の農園、さらに山梨県内でも栽培をおこな

う予定ですが、一部ではすでに種まきを終わりました。国立市内の武藤芳暉さん（国立はたけんぼ）の所でも、今年は赤米を栽培して下さることになっています。今年も頑張ります（4/18：東京都国分寺市）。

稲の収穫祭と神社信仰(Ⅷ)

長沢 利明

5 収穫感謝祭と新嘗祭・つづき

宮中の新嘗祭はもともと、11月の下卯日、すなわち11月中の最後の卯の日になされており、卯の日が三度ある年は中卯日、すなわちまん中の二度目の卯の日に、それがおこなわれることになっていました。701年（大宝元年）の『大宝令』に、そのことが定められておりますが、『日本書紀』の皇極紀元年（642年）11月丁卯（15日）の条に、「天皇、御新嘗（おんにはなひをきこしめす）。又是日、皇太子大臣各自、新嘗（にはなひしき）」と記されていて、その頃からすでに日取りの決め方は変わっていなかったことがわかります。

それでは一体なぜ、卯の日という日が新嘗祭の祭日に選ばれることになったのでしょうか。

図2 宮中三殿① [村上, 1977]

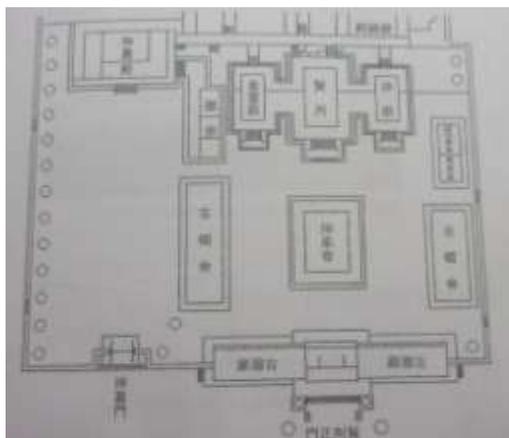
各地の民俗事例を見てみますと、卯の日というのは概して吉日としてとらえられており、その日に例祭をいとなむ神社もありますし、田の神あるいは稲作にともなう諸行事、正月の神の去来などに関して、この日を重んじる例がよく見られるのです。「神祀る卯月」、すなわち稲の種子をまく月が卯月であったことなども、関係あるのかも知れません[柳田, 1963:p. 206]。埼玉県戸田市などでは、正月の初卯の日の卯の刻に歳神様がお帰りになるという、それをカミアガリ（神上がり）と呼んでいますし、卯の日はとても神聖な日なので、種子まきや田植えをしてはならないともいわれていました[長沢, 1983:p. 841]。卯の日は、歳神・穀霊に深い関わりのある日と、考えられていたのではないのでしょうか。

新嘗祭の挙行日は干支（えと）にもとづいて日取りが決められるため、年によってその暦日が違っており、1868年（明治元年）を例にとると、11月18日に宮中の新嘗祭がおこなわれていますが、毎年日取りが変わるので、なかなか国民の間にそれを定着させることができないので、日取りの一定化がはかられることになりました。1873年（同6年）、



図2 宮中三殿① [村上, 1977]

図3 宮中三殿②[神社本庁教化広報センター, 2018]



日本は江戸時代以来、続けられてきた旧暦(太陽太陰暦)を廃止し、欧米なみに新暦(太陽暦)を採用して、暦法を全面的に切り替えることになったのですが、それは日本が近代国家として世界に認知されるために、どうしても必要なことだったのです。

明治政府はこの年、かなり強引なやり方で、新暦導入を強行するのですが、あわせて国民がしたがうべきいくつかの祝祭日を制定し、その時に初めて新嘗祭の日取りを11月23日と定めたのです。採用されたばかりの新暦にあてはめてみると、この年の11月の二度目の卯の日はたまたま新11月23日にあたっていたため、以後それが定着することとなりました。1908年(同41年)に公布された皇室祭祀令では、「新嘗祭、十一月二十三日より二十四日に亙る」と規定され、11月23日の深夜から翌24日の未明にかけて、厳粛な儀式が宮中で斎行されることとなったのです。そして

戦後の1948年(昭和23年)、それが「勤労感謝の日」となったというわけなのです。

ところが、この11月23日という日はもともと、日本人にとって大変重要な日とされてきたのでして、いわゆる二十三夜の夜籠りとか大師講とか呼ばれる行事が、昔からこの日におこなわれてきました。大師講の日には、大師粥・霜月粥と呼ばれる小豆入りの粥を作って食べ、神にもささげられることになっていましたが、重要な儀礼の始まりや終りの日に赤い色をした粥を食べるのは、赤米の持つ特別な儀礼的と意味とも関係があるのではないかと、かつて柳田国男も指摘していたことなども思い

起こされ[柳田, 1963: pp. 206-208]、実に興味深い問題がそこには含まれているのです。まったくの偶然であったとはいえ、大師講や二十三夜の行事が古くからなされていたこの11月23日という日が、改暦後の新嘗祭の日にあてられることとなったのは、まことに感慨深いことでもあったのです。

さて、皇室行事としての新嘗祭は、どのようになされる儀式だったのでしょうか。それはきわめて特殊な儀式なのでして、今でもそれが宮中の神嘉殿という所でおこなわれております。いわゆる宮中三殿という神聖な場所が、皇居の奥深い所にあり、三種の神器の一つである八咫鏡(やたのかがみ)を祀る「賢所(かしこどころ)」、天神地祇を祀る「神殿」、皇祖皇霊を祀る「皇霊殿」の三殿が並んで立っているのですが、それらに隣接して「綾綺殿(りょうきでん)」・「神嘉殿(しんかでん)」と呼ばれる施設もあります(図2~3)。綾綺

殿は新嘗祭の前日に天皇の鎮魂祭がおこなわれる所で、神嘉殿はまったく、新嘗祭のためだけにある建物なのですから、年に1回しか用いられることがありません。大きな建物で、内部には悠紀殿（ゆきでん）・主基殿（すきでん）の二つの儀式の斎場があります。

11月23日の夕刻、新嘗祭の儀式が始まると、まずは天照大御神をはじめとする天神地祇を祀り、天皇は沐浴潔斎の禊（みそぎ）を済ませた後、裸足で悠紀殿に入ります。殿内には「真床追衾（まどこおぶすま）」という神の寝座が設けられていますが、八重畳の上に追衾をかぶせ、坂枕を置いたもので、要するに神様のベッドです（図4）。そのかたわらに天皇が着座し、反対側には神の着座する神座があって、両座の間には「御食薦（みすごも）」を敷き、そこに米と粟の飯と粥、神饌米で醸された白酒（しろき）と黒酒（くろき）、鮮魚・干魚・果実・汁・羹（あつもの）などの神饌が、一つずつ並べられます。天皇と神とが差し向かいで、ともに神饌を食するという供進と直会とが、儀式の中心となっているのです【村上, 1977: pp. 17-19】。

さらに、この日の深夜、今度は主基殿での儀式がおこなわれるので、天皇は今度は主基殿内に入って、先の悠紀殿での儀式と同じことを、そちらでも繰り返しおこなうのですが、すべてが終了した頃には11月24日の明け方

図4 真床追衾【村上, 1977】



写真13 献穀田記念碑（鹿児島県種子島荃永）

になっており、長時間を要してなされる厳粛な儀式が、ようやく終了するのです。こうして見ると、宮中の新嘗祭がいかに特殊で、しかも大掛かりなものであったかがわかりますし、このような儀礼は宮中以外にはまったく見られず、それは日本中の神社でなされている新嘗祭とはまるで異なる儀式であったといえるのです。（つづく）

【表紙解説】 ニッポン寿司列島⑥—バツテラ寿司(大阪府)—

誰もが知る大阪名物のバツテラ寿司は、今では東京でも売られている。酢で締めた鯖を酢飯の上に載せ、みっちり押し固めた、関西風の典型的な押寿司・箱寿司である。寿司ネタの鯖の表面に、甘酢で煮た半透明の白板昆布（バツテラ昆布）をシート状にかぶせ、風味を加えているのがいかにも大阪風で、京都風の鯖寿司とは異なっている。なお、バツテラの語源はポルトガル語の *bateira* から来ており、それは洋式船に積まれた小船（はしけ舟）のことを表す単語である。かつての押寿司には鯖でなくコノシロ（東京でいうところのコハダ）が用いられており、魚の形が小船に似ていたので、そう呼ばれるようになったといわれている。